



(10アール当り)

時期	方法	資材と施用法
礼肥 [収穫後～9月上旬]	根の活力強化、樹勢の回復、秋の養分蓄積、花芽の充実 (枝が充実し、開花直後の落花が無くなる)	<ul style="list-style-type: none"> ●根っ酵素3～5ℓを収穫直後に薄めて灌水(300倍前後)または500倍で葉面散布(葉が薄く傷んでいる場合) <p>9月上旬に礼肥として、下記3種を同時施用する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●マンゾク・粒状30～50kg →根から体力強化。 ※特に樹勢が弱ったり、土壌障害の心配がある場合は必須。 ●硫安20kg(または速効性の肥料20kg) ●畑の大将<青>20kg ※土壌pH:6.5以上と高い場合は田畑の大将<赤>を施す。 →N・Caの同時施用で枝の徒長防止、蓄積と花器形成の促進。
元肥(冬肥) [落葉後、休眠期、11～12月]	1年分の基本となる地力作り、翌春の樹体の基礎を作る栄養の準備	<ul style="list-style-type: none"> ●ラクトバチルス600g →通気性、保水・保肥性向上。 ●堆厩肥(牛糞など)2トンまたは米ヌカ150kg以上 ●硫安60kg ※複合肥料を使う場合はチッソ成分12kgとする。 堆厩肥が鶏糞等で、チッソ成分が多い場合、硫安を減らす。 ※堆厩肥・有機物が不十分な場合は硫酸カリ20kgを追加。 ●畑の大将<青>60kg ※土壌pH:6.5以上と高い場合は田畑の大将<赤>を施す。 ※カルシウム栄養をしっかり効かせて地力作りをする事。 ※モモはやや酸性に強く、pH:5.3～6.3が好適。土壌pHを測定して調節。 ※上記4種を同時に施して、耕す。(土と軽く混ぜる) 施肥位置は樹の近くだけでなく、園全体に広く全面散布する。
芽出し肥 [3月]	春～肥大期の根の強化、花と実、枝葉の活力を強化	<ul style="list-style-type: none"> ●マンゾク・粒状30～50kg →根から樹勢強化。 まず根を強く働かせて、開花・結果・肥大の力をつる。 ※特にモンパ病・根頭ガンシュ病・イボ皮病・線虫の恐れがある場合、もし元肥が不十分な場合は、下記の肥料も同時に施用する。ただし開花前にチッソ過多にせず、チッソはカルシウムと併用する。また土や樹がチッソ過多ならカルシウムのみを施す。 硫安20kg/田畑の大将<赤>20kgまたは畑の大将<青>
肥大期の散布 [4～7月]	初期の肥大促進 幼果の充実、	<ul style="list-style-type: none"> ●根っ酵素500倍液を葉面散布(開花・授粉20日後頃、4月下旬) ※不授精果は落果し、授精果はこの後、前半の肥大ピークとなる。
※状態によって 適宜、調節	新梢・葉の充実 (枝葉を伸ばし過ぎない)	<ul style="list-style-type: none"> ●花咲くCa液500倍を葉面散布(開花27日後頃、5月上旬) その後、5月～6月下旬は、7日ないし14日間隔でCaを葉面散布。 →新葉を厚くし、デンブ蓄積を進め、6月上旬の硬核期前後の落果(ジューン・ドロップ)や、黒星病・果実腐敗(灰星)を減らす。 ※特に徒長やカルシウム不足の場合、また高品質を狙う場合は、6月上旬(収穫40日前頃、肥大休止期)に、田畑の大将(赤)を20～30kgを施用すると非常に効果的。
	根の退化防止、 果実の肥大促進	<ul style="list-style-type: none"> ●根っ酵素500倍液を葉面散布(6月中下旬、7日間隔で2回) →梅雨で傷み、減退する根の力を回復させる。 ※肥大の後半ピークにもって行く。上記花咲くCa液とを交互に散布。
	成熟促進、	<ul style="list-style-type: none"> ●花咲くCa液500倍を葉面散布(収穫20日前頃、6月末～7月中旬) ※肥大ピークを過ぎてから7日間隔で2回散布が効果的。

※土壌病害・木の衰弱への対策=軽い場合マンゾク・粒状50kg散布。特にひどい場合は根っ酵素100倍液で根を洗い(1本100ℓ)、3日後、ラクトバチルス30gを米ヌカ7kgに混ぜて散布し、覆土。その後、根っ酵素300倍液を7日間隔2回灌水(灌注)し、あとも根を伸ばす手当て継続。
※標準品種=《中生》白桃、大和白桃、清水白桃。およびネクタリン(無毛の油桃)《早生》白鳳、あかつき、さおとめ等の場合は、元肥2割減。